理学療法学科・作業療法学科１年

授業科目名	心理学
区分	基礎分野
学期、単位、時間	後期　2 単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	心理学	
担当講師	宍戸　聖弥	
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《　　関連資格　公認心理師、作業療法士　　》	
授業の目的	①心理学について基礎を学び、医学との関連性を理解することができる。 ②心理学基礎実験等を通して心理のメカニズムを知ることができる。	
授業の概要	第 1-2 回	心理学の歴史 ＜到達目標＞ ①心理学の歴史の概要を理解できる ②心理学を学ぶ意味や関係性を知ることができる。
	第 3-6 回	感覚と知覚、バイアスなど ＜到達目標＞ ①人間の感覚と知覚、バイアスの概要を理解できる。 ②錯視を通してメカニズムを理解できる。
	第 7-10 回	心理学とリハビリテーションに関連する人物学習 ＜到達目標＞ ①心理学や人間発達に関連する人物とその研究や成果について学習できる。
	第 11-14 回	パーソナリティ検査、心理実験、体験関連など ＜到達目標＞ ①検査や心理実験、体験の概要を知る。 ②実際に実施し、自身や他者を客観的に分析できる。
	第 15 回	定期テスト（課題による採点を含む）
テキスト 参考書	配布資料を中心に進める。 事前準備する教科書はなし。	
評価の方法	課題および定期テスト等の合計が 60 点以上を合格とする。	
授業の形式 受講上の注意	座学やグループ演習などを実施。 上記授業の順番および各コマの時間数は変更する可能性あり。	

理学療法学科・作業療法学科１年

授業科目名	文学
区分	基礎分野
学期、単位、時間	後期　１単位　15 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	文学
担当講師	西田　美惠子
実務経験	□有　■　無　　関連資格：なし
授業の目的	日本文学は、明治の初めに日本にやってきた海外の文化人において古典文学に相当関心が高く、万葉集や古事記など直ぐに翻訳された経緯を持つ。現在においてグローバル的思考・活動が進み、改めて『万葉集』『古今和歌集』『伊勢物語』『源氏物語』を部分的に取り上げ、古典文学がアイデンティティーの一つとして培いたい。なお、それらは世界文化遺産となった能・歌舞伎などとのつながりが深く、意外に日常生活と直結しており、現代生活と重なるその意外性を通して、心の枠を広げさせたい。グローバルな時代、文字という存在にも目を向かせたい。日本語の文字獲得は、中国古代から取得した漢字・漢文を通し、特に万葉集の和歌を通して日本言語の文字化へとその過程を辿ることができるが、鉛筆で文字を書く機会のない現在を鑑みて、改めて文字というものと文学との関連に迫らせたい。
授業の概要	グローバル社会における海外の文化人に関心の高い古典文学 １　世界においても稀有な歌集『万葉集』（成立８世紀末） ⑴　世界に類のない歌集『万葉集』～身分に関係のない和歌の選出（歌道の本質） ⑵　歌体～短歌・長歌・旋頭歌等　（現代に通じる情緒や季節感など） ⑶　万葉仮名の意義～文字のなかった上代における文字の獲得（和魂漢才） 中大兄皇子・額田王・柿本人麻呂・持統天皇等の紹介　（最終編纂者：大伴家持） ２『古今和歌集』～905 年（日本で初めての平仮名の勅撰和歌集） ⑴　「古今集仮名序」（紀貫之）の意義～和歌を通し、仮名文字文化の到来 六歌仙の紹介～小野小町を核に、文屋康秀・僧正遍照など ⑵　文学の興隆・・・後世へと導いた仮名文字と六歌仙の華々しい贈答歌 ３　『伊勢物語』～古今和歌集との関連。在原業平を中心に　（宮中で人気） 平仮名文学の物語への移行的存在　～『源氏物語』への影響 ４『源氏物語』～長編なので特に著名な帖を取り上げる ⑴　『源氏物語』54 帖の梗概、特に第４帖「夕顔」光源氏と夕顔が出会う場面 ⑵　紫式部と『源氏物語』～藤原俊成・定家、「源氏供養」を通した文学の捉え方 ５　おわりに
テキスト 参考書	レジュメ・パワーポイント 古典文学現代訳（原語と対訳）を参考に 『源氏物語』の現代語の訳者は多い。（谷崎潤一郎・与謝野晶子・瀬戸内寂聴など）
評価の方法	１、毎回の授業のあと、各自におけるまとめとなるワークシート ２、記述テスト３回（予告）①『万葉集』　②『古今・伊勢』③「源氏物語』

理学療法学科・作業療法学科１年

授業科目名	統計学
区分	基礎分野
学期、単位、時間	後期　　2 単位　　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	統計学	
担当講師	亀山 一義　宍戸 聖弥	
実務経験	亀山 一義　☑ 有　□ 無　《 関連資格：認定作業療法士・保健学博士 》 宍戸 聖弥　☑ 有　□ 無　《 関連資格：認定作業療法士・保健学修士 》	
授業の目的	根拠に基づいた理学療法および作業療法を実践するためには、学術論文等の研究報告を正しく解釈する必要がある。それらを正しく解釈するために統計学は基本的な知識となる。本講義ではリハビリテーション領域で用いられる頻度の高い統計手法を理解し、学術論文を理解することを目的とする。	
授業の概要	第 1 回	EBM について（担当：亀山） 《到達目標》 ①：理学療法・作業療法について考える。 ②：根拠に基づいた理学療法・作業療法を実践する方法を理解する。
	第 2 回	研究デザインと妥当性（担当：亀山） 《到達目標》 ①：研究の必要性を知る。 ②：理学療法士・作業療法士が実践する研究を理解する。 ③：研究デザインと妥当性を理解する。
	第 3 回	尺度の基礎（担当：亀山） 《到達目標》 ①：4 つの尺度を理解する。 ②：数値を尺度に分類できる。
	第 4 回	統計学の基礎（担当：亀山） 《到達目標》 ①：統計学の必要性を理解する。 ②：統計学の基礎事項（平均の性質，標準誤差など）を理解する。 ③：データの尺度を理解する。
	第 5 回	推定と検定の基礎（担当：亀山） 《到達目標》 ①：推定と検定の仕組みを理解する。 ②：帰無仮説と対立仮説を理解し、仮説を立てることができる。 ③：有意水準と信頼区間の解釈を理解する。
	第 6 回	2 標本の差の検定（担当：亀山） 《到達目標》 ①：パラメトリック法とノンパラメトリック法を理解する。 ②：検定結果を理解し，解釈できる。
	第 7 回	相関の検定（担当：亀山） 《到達目標》 ①：相関の概略を理解する。 ②：検定結果を理解し、解釈できる。
	第 8-9 回	回帰分析（担当：宍戸） 《到達目標》 ①：回帰分析とその種類について概要を理解する。

		②：検定結果を理解し，解釈できる。
	第 10 回	グループワーク（第 1-9 回までのまとめ）
	第 11 回	グループテスト テスト内容：第 1-9 回までの配布資料から出題
	第 12-15 回	論文を読む 《到達目標》 ①：Google Scholar・J-STAGE を利用し、文献検索ができる。 ②：論文で使用されている統計手法を理解できる。 ③：論文内容を理解し、まとめることができる。
テキスト 参考書	参考書 ・石川朗著：リハビリテーション統計学 ・関屋著：真に役立つ研究のデザインと統計処理 ・有田清三郎著：医療のための統計学-データ解析の基礎と応用-	
評価の方法	・グループ単位で実施する筆記テスト（50%） ・レポート課題（50%）	
授業の形式 受講上の注意	座学	

はくほう会医療専門学校赤穂校

理学療法学科・作業療法学科１年

授業科目名	解剖学Ⅲ
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　１単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	解剖学Ⅲ
担当講師	西口　皓喜
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《　関連資格　理学療法士　》
授業の目的	本講義では脳を学び、役割・病態・患者像を説明できるようになる。 ・脳・神経の場所・役割・働きや脳と神経との関係性を説明できる。 ・脳の損傷部位から病態像（状態）を表現できる。 ・脳の局在から病態を生理・説明できる。
授業の概要	<u>授業の概略構成</u> 1.　神経系（５章） （神経系の分類、細胞、求心性神経と遠心性神経、灰白質と白質、シナプス、神経系の発生） ・全体的に理解し説明できるようになる。 2.　中枢神経各論 （髄膜・脳室・脳脊髄液、脊髄、脳（大脳、間脳、中脳、橋、延髄、小脳） ・局在から役割・働きを説明できる。 3.　末梢神経各論（脊髄神経、脳神経、自律神経系） ・神経の働き・部位などが説明できるようになる。 4.　感覚・運動の伝導路 ・細かい場所を理解し、病態解釈に役立てる。 5.　感覚器系（外皮、味覚器、平衡聴覚器、視覚器） ・感覚器の働き・役割を説明できるようになる。
テキスト 参考書	標準 PTOT 専門分野　解剖学
評価の方法	定期テスト・小テスト・グループワーク
授業の形式 受講上の注意	座学形式・グループワーク

理学療法学科　1年

授業科目名	機能解剖学
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　　1単位　30時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	機能解剖学
担当講師	橋本 宜昭
実務経験	☑ 有　　☐ 無　　《　関連資格　理学療法士　》
授業の目的	方向目標 　正確な触診ができるよう、知識・技術の土台を作る。 到達目標 ・骨の部位名が理解できる。 ・筋の名称を聞いて、形が想像できる。 ・筋の起始・停止が言える。 ・筋の起始・停止から関節運動を考え、適切な部位で触診ができる。 ・靭帯の走行を理解し、適切な部位で触診ができる。
授業の概要	オリエンテーション 上肢の骨・筋・靭帯の触診 下肢の骨・筋・靭帯の触診 頸部体幹の骨・筋・靭帯の触診
テキスト 参考書	運動療法のための機能解剖学的触診技術(上肢、下肢・体幹)：メディカル　ビュー
評価の方法	筆記試験(上肢・下肢筋の起始・停止について) 実技試験(上肢筋触診、下肢筋触診)
授業の形式 受講上の注意	実技形式 注意：服装は実習着とする。

作業療法学科１年

授業科目名	機能解剖学（令和８年度）
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　１単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	機能解剖学
担当講師	武田　照麻
実務経験	■　有　　□無　《関連資格　作業療法士》
授業の目的	作業療法を行っていくうえで 必要な骨・筋肉・靭帯の触診技術を習得する。 触診の実技を通じて解剖学的機能を学習する。
授業の概要	《教育目標》 上肢、下肢、体幹の骨・筋肉・靭帯を触診することで その解剖学的な機能を理解する。 《行動目標》 上肢、下肢、体幹の機能解剖学的に重要となる部位を正確に触診する。 1 回　オリエンテーション 2～7 回　上肢の骨、筋肉・靭帯の触診方法を学び、解剖学的機能を考える 8 回　確認テスト 9～13 回　下肢の骨、筋肉・靭帯の触診方法を学び、解剖学的機能を考える 14 回　体幹の骨、筋肉・靭帯の触診方法を学び、解剖学的機能を考える 15 回　総合試験
テキスト 参考書	運動療法のための機能解剖学的触診技術（上肢、下肢・体幹）メジカルビュー（電子書籍版）
評価の方法	口頭試問、実技試験の総合判定とする。
授業の形式 受講上の注意	実技中心とする（場合により Web　オンラインで行う） ＊講義は骨・筋・靭帯の触診を行うので、動きやすくまた触診が行いやすい服装で出席するようにして下さい。

理学療法学科・作業療法学科　１年

授業科目名	生理学Ⅱ
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　　１単位　　３０時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	生理学Ⅱ
担当講師	森澤　文博
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《　　関連資格　理学療法士　　》
授業の目的	方向目標 ➢ ヒトは生体内外の種々の変化に適応し全体として調和のとれた生命現象を営んでいる。この調和が崩れたものが疾病であり、今後疾病を理解するうえで重要なヒトの正常機能を暗記ではなく、理解する 到達目標 ➢ 下記分野の国家試験問題が解けること
授業の概要	７．血液 ８．心臓と循環 ９．呼吸とガスの運搬 １１．酸塩基平衡
テキスト 参考書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　生理学：医学書院
評価の方法	定期試験
授業の形式 受講上の注意	座学形式

理学療法学科・作業療法学科　１年

授業科目名	生理学演習
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　　１単位　　３０時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	生理学演習
担当講師	森澤　文博
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《　　関連資格　理学療法士　　》
授業の目的	方向目標 ➢ ヒトは生体内外の種々の変化に適応し全体として調和のとれた生命現象を営んでいる。この調和が崩れたものが疾病であり、今後疾病を理解するうえで重要なヒトの正常機能を暗記ではなく、理解する 到達目標 ➢ 下記分野の国家試験問題が解けること
授業の概要	１０．尿の生成と排泄 １２．消化と吸収 １３．内分泌 １４．代謝と体温 ４．中枢神経系　Ｃ～Ｊ
テキスト 参考書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　生理学：医学書院
評価の方法	定期試験
授業の形式 受講上の注意	座学形式

理学療法学科・作業療法学科　1 年

授業科目名	運動生理学
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　　1 単位　　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	運動生理学
担当講師	中村　めぐみ
実務経験	☑ 有　　☐ 無　　《　関連資格　理学療法士　》
授業の目的	運動生理学は身体の運動に対する生理反応を理解する学問である。 基礎となる健常者が運動を行った際の生理反応や、運動不足の弊害や運動が身体に及ぼす影響を理解し、正しい運動処方を行えるようにする。
授業の概要	**第１章　骨格筋の構造と筋収縮** 骨格筋の構造 筋収縮の仕組み 筋線維の種類 筋肉の収縮様式 最大筋力の優劣に影響する要因 トレーニングによる筋力や筋量の変化 **第３章　運動と循環・呼吸** 血液の循環と心臓の働き、血圧 呼吸と肺の働き、肺と組織でのガス交換 酸素摂取量、運動時のエネルギー代謝 トレーニングによる心臓ならびに骨格筋の適応 **第４章　運動とエネルギー源** エネルギー源となる栄養素 糖質・脂質の貯蔵量・貯蔵形態 運動中のエネルギー源としての糖質・脂質の使い分け 糖質と疲労、 運動と糖尿病、 エネルギー供給系 **第５章　エネルギー消費量** 総エネルギー消費量の内訳 **第９章　体温調節と水分補給** 熱産生、熱放散、体温調節機構 **第 10 章　加齢に伴う身体機能の変化** 筋力・筋量の変化、骨量の変化、全身持久力の変化、ロコモティブシンドローム
テキスト 参考書	栄養科学イラストレイテッド　運動生理学　羊土社
評価の方法	定期試験（筆記）100％
授業の形式 受講上の注意	座学

理学療法学科・作業療法学科　1年

授業科目名	運動学演習Ⅰ
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　　1単位　　30時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	運動学演習Ⅰ
担当講師	橋本　宜昭
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《　関連資格　理学療法士　》
授業の目的	➢ 一般目標 ・運動学の知識のもとに、実際の身体運動を分析することを通じてその仕組みについて理解を深める ➢ 行動目標 ・筋骨格系の構造・機能と関節運動について理解する。 ・理想的とされている姿勢や基本動作を理解する ・姿勢保持、基本動作に必要な筋活動を理解する
授業の概要	・下肢関節の構造・機能と関節運動 ・下肢に関する実習 ・肩関節、肩甲帯の構造・機能と関節運動 ・肩関節、肩甲帯の実習 ・肘関節～手指の構造・機能と関節運動 ・肘関節～手指の実習 ・脊柱・体幹の構造・機能と関節運動 ・歩行について
テキスト 参考書	基礎運動学　第7版：医歯薬出版株式会社 配布資料
評価の方法	筆記試験（50点） レポート課題（40点） 小テスト（10点）
授業の形式 受講上の注意	座学・実技形式

理学・作業療法学科１年

授業科目名	病理学
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　１単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	病理学
担当講師	國近　敏伸
実務経験	☑有　　□　無　　関連資格　作業療法士
授業の目的	・細胞傷害、循環障害、炎症、腫瘍について説明できる。 ・主要な疾病の病因、病態、症状、予後について説明できる。 ・疾病による機能障害について説明できる。
授業の概要	≪内容≫　総論 病理学の概要 病因論 退行病変、進行性病変 代謝異常 循環障害 免疫 炎症、感染症 腫瘍 老化 先天異常 各論 循環器 呼吸器 消化器 神経系 運動器 内分泌臓器　　造血器　など まとめ　定期試験 ≪到達目標≫ ・細胞死、炎症、腫瘍、アレルギーなどについて説明できる ・講義で扱った、疾病の病因、病態、症状、機能障害、予後について説明できる
テキスト 参考書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　病理学　第５版 シリーズ監修　奈良　勲　鎌倉矩子
評価の方法	中間テスト・期末試験による合否判定
授業の形式 受講上の注意	座学を中心に行う。 一部をオンライン授業で実施する可能性があり

理学療法学科・作業療法学科１年

授業科目名	一般臨床医学
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　　１単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	一般臨床医学
担当講師	萱野　公一
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《　　関連資格　医師　　》
授業の目的	臨床における医学の基礎を学ぶ。
授業の概要	１．ライフサイクル ２．問診と診察 ３．手術 ４．損傷 ５．外科感染症 ６．腫瘍 ７．周産期の管理 ８．術後管理 ９．輸血 １０．　ショック １１．　移植 １２．　医用工学 １３．　人工臓器 １４．　まとめ １５．　試験
テキスト 参考書	最新外科学
評価の方法	定期試験にて 60 点以上を合格とする
授業の形式 受講上の注意	座学

理学療法学科・作業療法学科１年

授業科目名	内科学
区分	専門基礎分野
学期，単位，時間	後期　　１単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	内科学
担当講師	津田 朋広 先生、　傳 秋光 先生
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《 医師 》
授業の目的	リハビリテーションを実施するために、必要不可欠な内科学の知識を身につける。
授業の概要	１．　第 1～3 章　内科学とは　内科的診断と治療の実際　症候学 ２．　第 4 章　循環器疾患 ３．　第 5 章　呼吸器疾患 ４．　第 6 章　消化器疾患 ５．　第 7 章　肝胆膵疾患 ６．　第 8 章　血液・造血器疾患 ７．　第 9 章　代謝性疾患 ８．　第 10 章　内分泌疾患 ９．　第 12 章　アレルギー疾患、膠原病と類縁疾患、免疫不全症 １０．　第 13 章　感染症 （１～１０回：津田先生担当） １１．　糖尿病について １２．　糖尿病について １３．　腎機能障害について １４．　腎機能障害について （１１～１４回：傳先生担当） １５．　筆記試験
テキスト 参考書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　内科学 配布資料
評価の方法	筆記試験にて 60 点以上を合格とする。
授業の形式 受講上の注意	座学

理学療法学科・作業療法学科１年

授業科目名	整形外科学Ⅰ
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　１単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	整形外科学
担当講師	高橋　欣吾・中居　祐大
実務経験	有り　関連資格：医師
授業の目的	整形外科疾患に関する治療法とその後のリハビリテーションについて理解する
授業の概要	１．　整形外科の基礎科学（骨） ２．　整形外科の基礎科学（関節） ３．　整形外科の基礎科学（神経・筋） ４．　整形外科の基礎科学（痛み） ５．　診断総論 ６．　治療学総論 ７．　軟部組織・骨・関節の感染症 ８．　リウマチ性疾患 ９．　慢性関節疾患（退行性・代謝性） １０．　阻血性疾患 １１．　先天性骨関節疾患・代謝性骨疾患・骨腫瘍 １２．　ロコモティブシンドローム １３．　脊椎の疾患（１）頚椎・胸部 １４．　脊椎の疾患（２）胸椎・腰推 １５．　定期試験
テキスト 参考書	標準整形外科学　第 16 版　医学書院
評価の方法	試験結果による
授業の形式 受講上の注意	座学

理学療法学科・作業療法学科１年

授業科目名	神経内科学Ⅰ
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　１単位　30時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	神経内科学Ⅰ	
担当講師	西口 皓喜　國近 敏伸	
実務経験	西口 皓喜：☑ 有　☐ 無　《 関連資格：理学療法士 》 國近 敏伸：☑ 有　☐ 無　《 関連資格：作業療法士 》	
授業の目的	理学療法および作業療法の対象となる神経疾患について理解を深める。 神経疾患により生じる機能障害・活動制限・参加制約に対する治療方針とゴール設定を円滑に、かつ効果的に進められるように幅広い知識を習得する。	
授業の概要	第1・2回	中枢神経系の解剖と機能 《到達目標》 ①：中枢神経の構造を理解することができる。 ②：中枢神経の機能を理解することができる。
	第3回	意識障害・脳死・植物状態 《到達目標》 ①：意識障害のメカニズムを理解することができる。 ②：意識障害の分類を理解することができる。 ③：JCS・GCS などの評価分類を理解することができる。
	第4回	運動麻痺・錐体路徴候・筋萎縮 《到達目標》 ①：中枢神経と末梢神経の相違を理解することができる。 ②：錐体路徴候を理解することができる。 ③：筋萎縮の特徴を理解することができる。
	第5回	錐体外路徴候・不随意運動 《到達目標》 ①：錐体外路と基底核の関連を理解することができる。 ②：錐体外路徴候を理解することができる。 ③：不随意運動の特徴を理解することができる。
	第6回	運動失調 《到達目標》 ①：運動失調の分類を理解することができる。 ②：運動失調でみられる徴候を理解することができる。 ③：運動失調の検査法を理解することができる。
	第7回	感覚障害 《到達目標》 ①：感覚路を理解することができる。 ②：感覚障害の分類を理解することができる。
	第8回	高次脳機能障害（失語症） 《到達目標》 ①失語症分類とタイプ別の症状・特徴を理解することができる ②言語中枢の局在と機能を理解することができる ③検査法と言語療法の基本原理を理解することができる
	第9回	高次脳機能障害（失認） 《到達目標》 ①失認の症状と責任病巣を理解することができる ②失認の検査法と特徴的所見を理解することができる ③左半側空間失認の治療法を理解することができる
	第10回	高次脳機能障害（失行）

		《到達目標》 ①失行の定義と分類を理解することができる ②それぞれの特徴的な症状と責任病巣を理解することができる
	第11回	高次脳機能障害（記憶障害） 《到達目標》 ①記憶の処理過程と関連する神経路を理解することができる ②記憶の分類を理解し、症状、検査法を理解することができる
	第12回	高次脳機能障害（注意障害） 《到達目標》 ①注意障害の定義・症状を理解することができる ②検査法と特徴的所見を理解することができる ③治療法（訓練法）や代償法を理解することができる
	第13回	高次脳機能障害（遂行機能障害） 《到達目標》 ①定義や症状を理解することができる ②検査法と特徴的所見を理解することができる ③治療法（訓練法）や代償法を理解することができる
	第14回	高次脳機能障害（社会的行動障害） 《到達目標》 ①症状を理解することができる ②検査法と対応法を理解することができる
	第15回	まとめ・確認テスト
テキスト 参考書	標準理学療法学・作業療法学　基礎専門分野　「神経内科学」　第６版	
評価の方法	定期試験による	
授業の形式 受講上の注意	座学	

理学・作業療法学科１年

授業科目名	小児科学
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　１単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	小児科学	
担当講師	宍戸　聖弥	
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《　　関連資格　作業療法士　　》	
授業の目的	①子どもの成長・発達学の基礎を知ること。 ②小児期に生じやすい疾患の病態の基礎を知ること。	
授業の概要	第 1-2 回	人間発達と小児科学 ＜到達目標＞ ①発達の定義や小児科学の成り立ちを理解できる。 ②発達の多様性や相互作用について理解できる。
	第 3-6 回	心身機能の発達の基礎 ＜到達目標＞ ①子どもの身体の発達のマイルストーンついて理解できる。 ②子どもの反射を知り、実演できる。
	第 7-11 回	小児の遺伝子疾患や重症心身障害について ＜到達目標＞ ①小児疾患の内、特に PT/OT に関係の多い疾患を理解できる。 ②疾患の特徴を知り、療法士としての観察評価ができる。
	第 12-14 回	身体機能（循環器を中心に） ＜到達目標＞ ①循環器の発達について概要を知ることができる。 ②心電図や心疾患について理解できる。
	第 15 回	定期テスト（第 1 回から 14 回で学んだ内容について）
テキスト 参考書	標準理学療法・作業療法学　専門基礎分野「小児科学」/ 冨田豊　編：医学書院	
評価の方法	レポート課題や定期テスト等の合計点が 60 点以上を合格とする。 上記授業の順番や時間数について変更する可能性あり。	
授業の形式 受講上の注意	座学、グループワーク演習（作成物の発表等行う場合があります）	

理学療法学科・作業療法学科　1年

授業科目名	多職種連携論
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　1単位　30時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	多職種連携論
担当講師	国近　敏伸
実務経験	☑有　　□ 無　　《　　関連資格　作業療法士　　》
授業の目的	リハビリテーションで係わる専門職の役割について理解を深め、チームとして協働することの大切さを理解する。 多職連携の基盤となるコミュニケーションについて学び、自己理解や円滑な対人関係に応用できる。
到達目標	多職種と協働することの大切さを説明することができる。 多職種連携教育の重要性を理解し、専門職種間、対象者・対象者家族との医療を取り巻く、専門職の資格要件・業務・役割などを理解し、説明することが出来る
授業の概要	①　オリエンテーション　授業の進め方　IPEのための知識 ②　多職種連携と多職種連携教育 ≪到達目標≫ 多職連携教育がなぜ必要か説明できる。 ③　④演習課題（コミュニケーションワーク）コミュニケーションに必要とされる力　グループワーク等 ≪到達目標≫ 具体的なコミュニケーション手法について説明できる ④　⑥コミュニケーションについて　　リーダーシップとは ≪到達目標≫ 良いリーダーとは何か。組織構造を理解しそれらの要素を説明できる ⑦⑧⑨⑩⑪⑫ グループワーク課題についての説明　課題発表 ≪到達目標≫ 多職連携の目的や求められる背景を説明できる 「医療の専門職」についてのグループワーク・発表 ≪到達目標≫ 様々な専門職の資格要件・業務・役割などを理解し、説明することが出来る ⑬⑭　具体的症例の紹介 ⑮期末試験
テキスト 参考書 準備するもの	・配布資料など
評価の方法	グループワークでの課題点　レポート
授業の形式 受講上の注意	座学・グループワークを中心とした講義

作業療法学科１年

授業科目名	作業学演習Ⅰ
区分	専門基礎分野
学期、単位、時間	後期　1 単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	作業学演習Ⅰ
担当講師	宍戸　聖弥
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《　　関連資格　作業療法士　　》
授業の目的	・作業活動の準備から作品の完成に至るプロセスを、学生自ら体験学習し、完成するまでの時間や難易度などについて学び、作業分析を習得する。 ①対象者の身体的機能・精神的機能・社会的機能のいかなる部分に関与するのか、 ②作業療法士がそれらをいかに治療に結びつけていくのか、を検討する。
授業の概要	1. 作業学演習について（1 コマ） 《到達目標》 ①作業療法における作業活動の役割について理解することができる。 ②自分や他者への作業活動の影響について知ることができる。 2. 作業分析（2～3 コマ） 《到達目標》 ①作業分析と活動分析の違いを理解できる。 ②作業に焦点を当てた分析を体験することができる。 3. ADL 課題の分析（4～6 コマ） 《到達目標》 ①身近な ADL の作業分析ができる。 ②身近な ADL を体験し、グループワークにより検討できる。 4. 革細工（7～11 コマ） 《到達目標》 ①革細工について作業分析、活動分析を実施できる。 ②必要な道具、手順、方法などを理解し、作品を完成させることができる。 ③作業の方法について、他者に教示することができる。 ④作業療法を実施する上での環境を基礎的なレベルで整えることができる。 5. ビーズ細工（12～15 コマ） 《到達目標》 ①ビーズ細工について作業分析、活動分析を実施できる。 ②必要な道具、手順、方法などを理解し、作品を完成させることができる。 ③作業の方法について、他者に教示することができる。 ④作業療法を実施する上での環境を基礎的なレベルで整えることができる。
テキスト 参考書	＜必須＞ ・能登真一：標準作業療法学 基礎作業学 第 3 版（医学書院：電子書籍） ＜参考＞ ・作業活動実習マニュアル　第 2 版　医歯薬出版
評価の方法	・提出課題（作品及びレポート課題により採点し，60%以上を単位取得とする）
授業の形式 受講上の注意	・座学、グループワーク等による ・材料費として 1,500 円程度必要となる予定。 ＊授業開始後に集金する。

作業療法学科１年

授業科目名	リハビリテーション管理学
区分	専門分野
学期、単位、時間	後期　１単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	リハビリテーション管理学	
担当講師	赤堀将孝	
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《　関連資格　作業療法士　》	
授業の目的	到達目標 ・病院・施設・在宅などで対象者に対する課題の把握とリスク管理やマネジメントについて理解できる。 ・個々の対象者に対して、必要なマネジメントを構築し、短・中期プランを構築できる。	
授業の概要	第 1～3 回	医療の質のマネジメント 《到達目標》 ①PX を理解する ②PX の観点から項目を整理することができる
	第 4～6 回	施設管理のマネジメント 《到達目標》 ①施設管理の方法を理解する ②施設の課題を明確にする ③施設の課題解決に向けた方略を提示できる
	第 7 回	救急救命講習 《到達目標》 ①救命講習の概要を理解する
	第 8～10 回	卒後教育のマネジメント 《到達目標》 ①養成教育と卒後教育の内容について理解する ②卒後教育について学び、将来のビジョンを明確にする
	第 11～13 回	理学療法管理・作業療法管理のマネジメント 《到達目標》 ①リハ管理における課題をモデルに当てはめることができる ②リハ管理における課題の解決方法を考案できる
	第 14 回	AI 活用におけるマネジメント 《到達目標》 ①AI 活用の利点・欠点を説明できる ②学習に活用する簡易アプリを開発できる
	第 15 回	筆記試験
テキスト 参考書	リハビリテーション管理学：斉藤秀之ほか	
評価の方法	筆記試験（1～14 回の範囲）、各単元ごとの発表および作成資料の提出	
授業の形式 受講上の注意	座学、グループ学習 授業の順番は前後することがある	

作業療法学科１年

授業科目名	作業療法評価法Ⅱ
区分	専門分野
学期、単位、時間	後期　１単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	作業療法評価法Ⅱ	
担当講師	亀山　一義	
実務経験	☑有　☐ 無　《 関連資格：認定作業療法士・保健学博士 》	
授業の目的	クライエントの作業遂行に影響を及ぼす因子の１つである筋力低下を理解し，適切な方法で筋力測定を実施できることを目的とする.	
授業の概要	第１回	MMT の評価基準 《到達目標》 ①：MMT の意義を理解する。 ②：0-5 段階評価基準を理解する。
	第 2-4 回	肩甲帯の運動に関連する骨格筋の筋力測定 《到達目標》 ①：運動と骨格筋の関連を理解する。 ②：運動に作用する骨格筋を触知できる。 ③：マニュアル通りに検査することができる。
	第 5-8 回	肩関節の運動に関連する骨格筋の筋力測定 《到達目標》 ①：運動と骨格筋の関連を理解する。 ②：運動に作用する骨格筋を触知できる。 ③：マニュアル通りに検査することができる。
	第 9-10 回	肘関節の運動に関連する骨格筋の筋力測定 《到達目標》 ①：運動と骨格筋の関連を理解する。 ②：運動に作用する骨格筋を触知できる。 ③：マニュアル通りに検査することができる。
	第 11 回	手関節の運動に関連する骨格筋の筋力測定 《到達目標》 ①：運動と骨格筋の関連を理解する。 ②：運動に作用する骨格筋を触知できる。 ③：マニュアル通りに検査することができる。
	第 12-14 回	指節間関節の運動に関連する骨格筋の筋力測定 《到達目標》 ①：運動と骨格筋の関連を理解する。 ②：運動に作用する骨格筋を触知できる。 ③：マニュアル通りに検査することができる。
	第 15 回	実技試験
テキスト 参考書	新・徒手筋力検査法　協同医書出版 運動療法のための機能解剖学的触診技術（上肢）	
評価の方法	実技試験	
授業の形式 受講上の注意	座学および実技	

作業療法学科１年

授業科目名	作業療法評価法Ⅲ（令和８年度）
区分	専門分野
学期、単位、時間	後期　１単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	作業療法評価法Ⅲ
担当講師	武田　照麻
実務経験	☑ 有　　□ 無　　《　　関連資格　作業療法士　　》
授業の目的	クライエントの作業遂行に影響を及ぼす因子の１つである筋力低下を理解し，適切な方法で筋力測定が実施できることを目的とする．
授業の概要	下肢に対する MMT 1~5 回　股関節の運動に関連する骨格筋の筋力測定 6 回　確認テスト 7~8 回　膝関節の運動に関連する骨格筋の筋力測定 9 回　足関節の運動に関連する骨格筋の筋力測定 10 回　確認テスト 《到達目標》 ①：動筋を触診することができる． ②：段階に応じた方法を説明することができる． ③：対象者に MMT を実施することができる． 頭頸部および体幹に対する MMT 11~12 回　頭頸部の運動に関連する骨格筋の筋力測定 13~14 回　体幹の運動に関連する骨格筋の筋力測定 15 回　総合テスト 《到達目標》 ①：動筋を触診することができる． ②：段階に応じた方法を説明することができる． ③：対象者に MMT を実施することができる． ＊本講義は作業療法評価法Ⅱと連動して実施する．
テキスト 参考書	新・徒手筋力検査法　協同医書出版 運動療法のための機能解剖学的触診技術（上肢、下肢・体幹）電子書籍版
評価の方法	実技試験（複数回に分けて実施、合計得点で評価する）
授業の形式 受講上の注意	座学および実技（場合により Web　オンラインで行う） 実習服で受講してください

作業療法学科１年

授業科目名	生活環境論
区分	専門分野
学期、単位、時間	後期　1 単位　30 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	生活環境論Ⅰ	
担当講師	國近敏伸	
実務経験	☑ 有　　□ 無　《　関連資格　作業療法士　》	
授業の目的	①高齢者や障害者を取り巻く社会の状況や支援の仕組みを理解する。 ②障害の捉え方と自立支援について理解する。 ③疾患・障害別にみた福祉住環境整備の考え方を理解する。	
授業の概要	第 1-10 回	＜学習課題＞ ・高齢者や障害者を取り巻く社会状況 ・障害のとらえ方と自立支援のあり方 ＜到達目標＞ ①医療保険制度と介護保険制度を理解し説明することができる。 ②地域包括ケアシステムと地域リハビリテーションについて理解し説明できる。
	第 11-14 回	＜学習課題＞ ・疾患別・障害別にみた不便・不自由と福祉住環境整備の考え方 ＜到達目標＞ ①疾患や障害の例を挙げ、それらに対する福祉用具の選定や、住環境整備のポイントを説明することができる。
	第 15 期末試験	＜学習課題＞ 福祉住環境コーディネーター検定試験の形式に準ずる出題 ≪到達目標≫ 検定試験の出題傾向を知り、合格の実力をつける
テキスト 参考書	・改訂版福祉住環境コーディネーター検定試験　2 級公式テキスト改訂 7 版 東京商工会議所　編 ・配布資料・準備資料	
評価の方法	・中間・期末試験の結果（60%以上を合格）	
授業の形式 受講上の注意	本科目は、一部をオンライン授業で実施する可能性があり	

作業療法学科１年

授業科目名	見学実習
区分	専門分野
学期、単位、時間	後期　１単位　40 時間
成績評価方法	下欄成績評価方法による

授業科目名	見学実習
担当講師	見学実習指導者
実習の目的	一般目標 　作業療法を理解するために臨床の現場において作業療法を見学し、業務全般の理解、関連職種との連携、社会的役割などを理解する。 行動目標 ・通所リハビリテーションの業務内容や社会的役割を説明できる。 ・通所リハビリテーションにおける作業療法部門の役割を説明できる。 ・作業療法士の基本的な業務内容を説明できる。 ・関連職種との連携を見学し、その概要と重要性を説明できる。 ・社会人としてふさわしい言動や態度で行動することができる。
実習の概要	実習前オリエンテーションと学習 ・通所リハビリテーションの業務内容や社会的役割を学習する。 ・通所リハビリテーションにおける作業療法部門の役割を学習する。 ・実習課題とその提出などについて理解する。 ・社会人としてふさわしい言動や態度について考える。 下記内容について臨床の現場で実習指導者の作業療法を見学する。 　①　周囲の人間（患者、スタッフ）とのコミュニケーション 　②　作業療法の基本的な業務 　③　多職種との連携 実習後 ・課題の提出。 ・実習で学んだことを共有し、学びを深める。 ・施設ごとに経験したことを発表する。
テキスト 参考書	適宜必要文献
評価の方法	実習期間中の成績評価は各実習施設の実習指導者が実施し学校に報告する。 実習後の内容を含める。 実習施設を７割、学校での提出物および発表を３割として配点する。
実習の形式 実習上の注意	規定の施設にて実習指導者の指示に従う。